

---

# パンドラ・ボックス

T's

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

パンドラ・ボックス

### 【Zコード】

N5478A

### 【作者名】

T's

### 【あらすじ】

俺が目覚めると見覚えのない部屋の中だった。目の前には見知らぬ男……そう……俺達は閉じ込められたのだ。残酷に襲う恐ろしい震、部屋は無数にあって出口はどこにあるかわからない。誰が閉じ込めたかは知らないが、俺は絶対脱出してやる！生き延びるために！！

## プロローグ

「ハア、ハア…、あと少しだ…」  
血だらけの男が呟いた。男の服や体についた血はそのほとんどが返り血で男が何をしたのか想像もしたくない。手にはナイフと方位磁針が握られている。

「あと少し…」

と、呟きながら男は扉を開ける。

……………ピコッ……………飛んでくるピアノ線…。

男が部屋に入った瞬間、男の頭は胴から離れた。

首のあつた所からは噴水の様に鮮血が吹き出し部屋を真紅に染めている…

足が一・三歩フワフワと歩いたあと頭を無くした体は力無く崩れた…。

## プロローグ（後書き）

読んでいただきありがとうございます 初めて書く小説ですので誤字・脱字あつたらすいません！感想いただけたら嬉しいです。

## 0-1 #見た「」とのない部屋

ガ「オ」…

鈍く響く音で目が覚めた。ぼやけた視界の中に誰か立つて俺を見て  
いる、しばらくボーッと見ていたが、ハツと我に返り改めて見てみ  
ると全然知らない男だ。周りを見渡しても知らない場所だ。

「……？」

訳がわからなくなつて頭の中がパニックになろうとしたその時、男  
が俺に話かけてきた。

「…君も閉じこめられたのかい？」

男が何を言つているのか理解できなかつた（閉じこめられた？俺が  
？）

さらに男は続ける、

「そうか、君もか。…じゃあ何もわからないんだね」

男はため息をついて目線を俺から外す。（なんだこの人は？）「は  
ド」「なんだ？」）考えれば考える程わからない！

俺は…男に恐る恐る話かけた。

「えつと…よく話が見えないんですけど？あなたは誰ですか？」「  
はド」「なんですか？」

男は部屋を見回しながら考え方をしていたようだが、いきなり話か  
けられた事にちょっと驚いたように返した。

「あ、ああ自己紹介が遅れたね、僕は幹村みきむら正ただ一応大学生だよ。  
僕もさつき起きたばかりでね…ここはどこなんだろうね？僕にもわ

からないんだ…。そうだ君の名前は？」

「俺は寺島一樹です。今年高2ですね…。あ！他には誰かいりませんですか？」

幹村は肩を落として力無く首を振った。

…しばしの沈黙。

そこで俺はこの部屋が妙な事に気づいた。部屋は一边10mぐらいの真四角で、壁と床はレンガのような石で敷き詰められており、何もめぼしい物はない、部屋といつよりは石の箱といった感じだ。そして一番奇妙なのは壁一つ一つの真ん中に鉄扉が付いている事、つまり一つの部屋に四つ扉があるのだ。

そこまで気付いたところで幹村が思い出したように言った。

「そうだ！君もこれを持つてるんじゃないかー？」

そう言って差し出した幹村の手には、小さなボイスレコーダーが握られていた。

## 02 #謎の声

「ボイスレコーダー……？」

俺は見覚えのないその機械に一瞬ためらつたが、恐る恐る上着のジヤケットをあせくつてみた。

ポケットから幹村が持っていると全く一緒のボイスレコーダーと、磁針が一本ある方位磁針のようなものが出でてきた。  
もちろんどちらも自分の物ではない…

俺は幹村に視線を戻した

「…」  
「…」

幹村もわからないという顔をしている。

「方位磁針はわからないけど…ボイスレコーダーは、僕のには何も録音されていなかつたんだ…」

それを聞いて改めて、自らの手に握られているボイスレコーダーを見つめた。

幹村も黙つて見ている…

俺は静かに再生ボタンを押した。

『ジ――――――』

三十秒ほど経過しただらうか何も聞こえてこない、もう消えうと思つたその時、ノイズと共に声が聞こえてきた。

『おはよう、寺島一樹くん。君は今、君の全く知らない部屋に居るはずだ。その部屋は一つではない、いくつも同じような部屋が数

え切れないほど連なつてゐる。だが、出口が無いわけではない、一つだけここから脱出する事のできる扉がある。君が持つてゐる方位磁針がそこに導いてくれるだろ?』

そこで『テープは切れた。

「…………。」

二人ともしばらく黙つていた。

テープの声は恐らくボイスチャレンジャーを使つてゐるのだろう、男か女かもわからない。

方位磁針が導く!？意味が分からぬ！しかも方位磁針をよく見えてみると磁針は一本ともピタツと止まつてゐる、どう考へても壊れてゐるとしか思えない！なんで俺の名前を知つてゐるのかもわからぬい？どうして閉じ込められたんだ？

そんな事を考へてゐると、幹村が口を開いた。

「今、僕が持つていたレコーダーを改めて聴いてみたんだ、そしたら…」

幹村は多少青ざめながら続けた。

「とても小さい声で入つていたから気が付かなかつたんだ…」

そう言いながら幹村は音量を最大にして流した。

『ジ――――』

やはり最初は何も聞こえない。しかし本当に最大音量なのかと思うほど、小さい声が途中から聞こえてきた。

『おはよう幹村 正くん。見覚えのない部屋が広がつてゐるだろ?…君のいる部屋はいくつも同じような部屋が連なつてゐる。出口は一つだけだ、しかし君の持つてゐる道具ではその出口を見つけるの

は絶望的だ……早く仲間を見つける事だね。……ああ言ひ忘れていたが午後9時を過ぎたると全ての部屋が安全に通れるとは限らない。仲間に会えることを祈つていろよ……』

「……」声は途切れた。

「安全に通れなくなる? どうこう意味だ? しかも時計がないのに時間がわかる筈ないじゃないか!」

俺がイライラして壁を蹴飛ばすと、幹村が思い出したように言った。

「あー時計ならあるよー多分……これが僕の道具なんだりうね。」

そう言って幹村は腕を差し出した。手首には小さなデジタルの腕時計。

時刻は PM 07 : 25 を指していた。

## 02 #謎の声（後書き）

読んでいただきありがとうございました。 小説は難しいところを理解して貰いたい知らされている今日この頃です。  
感想いただけたら嬉しいです。

### 03 #小さな発見

『安全じゃなくなる』

恐らく、それは俺達の命が保障されなくなるという意味だろ？。

その境界線は、PM09：00

幹村さんの時計では、今PM07：25だ。

…残り時間は1時間35分

手掛けかりは方位磁針。

だが磁針は動く気配はない。

俺と幹村さんは、とりあえずこの部屋を出ることにした。

「僕は、あの扉から入ってきたんだ。特に気になるような物はなかったから、別の扉を進んでみよう。」

幹村さんが指差したのは、俺からみたら真正面にある扉だった。

選択肢はあと三つ、右か、左か、後ろだ。

二人とも少し考えて…

「右にしな…」

「左はどう…」

「……………。」

見事にカブった！

…気まずい。

こんな時、自分の考えを押し通しせる人間というのが羨ましいと思つてゐる俺が力づてしまつた！？

俺は譲り合いの精神というものが妙に育まれてしまつてゐるのか、こういう場面がとても苦手だ。

…ここには幹村さんの言つたように、『右』にしようかと視線を幹村さんに戻すと、向こうも恐らく同じような事を考えてゐるようだ…。

よく考えれば幹村さんはあまり物事を強く述べるタイプには見えない。例えて言つなら氣の弱い優等生タイプだ。

幹村さんは眼鏡を気まずそうに上げ、ちょっと苦笑しながら言つた。

「…左に進もうか？」

俺はなんだか氣の毒になり、

「いや～俺、右でいいですよ。」

と言つてしまつた。

また少し気まずい空氣……。

こういう時の返事を選択ミスしない人間になろうーと、俺は誓つた。

自然と二人の視線は、最後に残つた後ろの方の扉に向かつていた。  
「この扉にしますか…」  
俺が言つた。

幹村も頷き、結局後ろの扉に落ち着いた。

一人とも苦笑しながら扉を開けようとしたその時、俺は扉の上に小

さう文字が彫つてある事に気付いた。

「南」と彫つてある。

ところによると、

俺はまだその文字を見つめている幹村さんを見送つて他の扉の上を見た。

右の扉には

「東」

左の扉には

「西」

幹村さんの入つてきた扉には

「北」

と、彫つてあつた。

幹村さんが口を開いた。

「方角はわかるよつになつているようだね……」

俺はポケットに入っていた方位磁針を取り出したが、依然磁針はピタリと止まつていて、投げ捨てたい衝動を抑えて、方位磁針をポケットに押し込んだ。

俺達は溜め息をついて、

「南」

と、記された鉄の扉に手をかけた。

時計はPM07：40を回つたところだった……。

ズズズズ…

扉はスライド式で重い音を響かせながら開いた。

「見た目程重くはないでしょ？」

と、幹村さんが言つ。

確かに鉄でできてはいるが、ある程度の力を加えればあとは惰性で開くという感じだ。

俺達は次の部屋に足を踏み入れた。

ガゴォン…扉は手を離すと再びゆっくりと閉まった。

またしても部屋には何もない。

俺と幹村さんはさらに次の部屋へ歩を進めた。

\* \* \* \* \*

何個部屋を回つただろうか、依然何もない部屋ばかりで俺達は自然と無言になつっていた。

不意に幹村さんが口を開いた。

「そういえば…ここに入れられる前の日の事覚えてる?」

「…え?」

確かに…今更だがその事を思い出した。

一瞬止まつた足を再び進めながら俺は答える。

「昨日は…今日が学校が休みだったから友達と遊びに行って、その後は一番仲のいい友達の家に泊まりに行きました。そして、そいつ

の家で眠つて…起きたらこんな訳のわからない所に閉じ込められていて…」

そう言いながらまた扉を開く。

今思えば昨日の当たり前の日常がとても懐かしい…。

なぜ、普通の生活を送っていた俺がこんな事になつているのか皆日検討もつかない。

外では騒ぎになつてているのだろうか？俺の両親はいない…幼い頃に交通事故で早くに逝つてしまつたのだ。その後は親戚のおじさん夫婦に引き取られた。そんなに勉強ができるわけでもなく、自慢できることも少ない俺を一人は本当の子供のように育てくれた、可愛がつてくれた、人の愛情を感じてこれた。だから今まで俺は生きてこれたのだ。

…しかし、今のこの現実は、その幸せ全てを否定するかのように重く影を落とす。誰か…頭のおかしい者の手によつて…。

最後に発した言葉からどれ位経つただろうか？俺はハツと我に戻り幹村さんを見た。俺はかなり険しい顔をしていたのだな…

幹村さんも様子を察してか、黙つている。

俺は幹村さんも昨日何をしていたのか気になつて…といつかこの空気が嫌になつて聞いてみた。

「あ！幹村さんは昨日の事、覚えてますか？」

やつと口を開いた俺に安心したように幹村さんは答える。

「僕は昨日は大学に提出するレポートが溜まつてたから、ずーっとそれをやつてたんだ。さすがに一日中やつて疲れたから、小休止しようと思つて眠つて…そして目が覚めたらいつてわけや。」

そつと干村さんはため息をつく。

「やつぱつ一人とも眠つてゐる間に連れてこられたんですね…」

もう何回開けたかわからない扉に手をかける。

時計を見ると… PM07：58。

30分近く歩き続けたらしげが何も発見はない。

少し考えて幹村さんが言つ、

「一樹君はどこの高校だったの？」

と、聞いてきた。

「俺は T業高校ですよ？」

と、答えた。ちなみにうちの高校は新体操が強いことで有名だ。全国大会にも何回も出場しており必ず上位にくい込むといつ、うちの高校の誇りである！

かくゆう俺もその新体操に憧れて入部した経験もあるが、鬼のよくな顧問と超ハードな練習に耐えきれず一年の終わりには退部してしまった。そんなこんなで今は帰宅部というポストにも慣れたころだつた。

うちの高校の事は幹村さんも知っているようで、「あの新体操が強い学校だね！」

と言つた。そして、

「僕は○○大学なんだけど…」

と言つてまた少し考えこんだ。

「それがどうかしたんですか？」

俺は何を考えているのか気になり思わず聞いてしまった。

「いや、考えてみただけど、無理なんだよね…君の高校のあるM県と僕の大学のあるT県の距離と移動時間を考えたら一晩で一人をさらうのは…。」

確かにその通りだ。一つの県はかなり離れている、一晩でその両方

にいる一人を誘拐するのは物理的に不可能だ。

つまり…

「「犯人は一人じゃない。」」

二人は同時に思つたことを口にした。しかし、それがわかつた所でなんの解決にもならない。むしろ、敵の存在がさらに大きなものになるような気がした…。

二人ともそれを感じたのかそれ以上は口を開かなかつた。

俺は気を取り直し、

「進みましようか！」

と、もう見飽きた扉を開いた。

「あつー。」

俺は扉の向こうの光景に思わず声が出た！  
部屋の隅っこに女の人がうずくまつている。幹村さんも気付き、互いに黙つて頷いて女人の人に歩み寄る。

不意に、女はうつむいていた顔を上げた…

俺達は驚いて足を止める。時刻はPM08：05…。9時まで一時間きつっていた…。

## 04 #前日（後書き）

読んで頂きありがとうございます！  
つたない文章ですが感想・批評送つてもらえれば光栄です；  
これからも宜しければ応援していただければ嬉しいです。;

「…誰？」

顔を上げた女は静かに聞いてきた。

白衣を纏い、髪は綺麗な黒髪のショートカットに男なら誰でも振り向きそうな整った顔立ち、白い肌。年は幹村さんと同じ位だろうか？一瞬その人の美貌に言葉が詰まってしまった…もう一度問われる、

「…誰？」

その声で俺は現実に戻された、

「あ、俺は…寺島一樹つていいます。あなたも…その…えつと」なぜか緊張してうまく喋れない。俺の代わりに幹村さんが尋ねた。

「僕は幹村正です。あなたもここに閉じ込められたんですか？」

そう聞かれた女は小さいため息をついて

「そうみたいね…」

と一言。俺はさつきの体たらくを搔き消す様に名前を聞く。すると女は静かに返した。

「私の名前は工藤冷。覚えなくてもいいわ…あなた達に名乗つて貰つて、私が名乗らないのは失礼だと思つただけだから…」

その答え方に俺の頭の中には全体的にすごく綺麗な人だけど、なんだかそれに比例するような冷たい印象が強く浮かんだ。この状況にも、あまり動じているようには見えない…。

午後9時になつたらこの建物?は安全じゃなくなる、と云えても

「…そうなの。」

としか答えなかつた。

俺達はボイスレコーダーの事を聞いたが彼女は持っていないらしい。代わりに

「これならポケットに入つていたわ」

とルービックキューブのような物を取り出した。金属でできているようで一面は九つに分かれているがその一つ一つにアルファベット

が一文字ずつ彫り込まれている。これも脱出に関係あるのだろうか？

工藤さんは

「私には必要ないから」

と俺達にそれを差し出す、俺達は少し考えたがそれに渡された道具はきっと何か意味があると思い断つた。工藤さんは

「そう。」

と呟き、ポケットにそれをしまつ。

沈黙が流れる。

俺は考えていた、他にまだ閉じ込められた人がいるのだろうか？その人達を全員見つけて力を合わせないとここから出る事はできないのだろうか？考えれば考えるほど不安になつてくる…。

思い出したように突然工藤さんが口を開く

「そういえば…あなた達が入つてくる少し前…あなたと同じ年頃の男子子が入つてきたわ。」

そう言つて俺を指差す。なんでそんな大事な事を早く言わなかつたんだろう！この人は？時計を見ていた幹村さんも振り向く。

「確かに名前はカイドウ…。右手に傷があつたのは覚えているわ」

「えつ！？」

思いがけない台詞に俺は驚く。

カイドウ…右手の傷…俺には心当たりがあった。

## 05 #三人目（後書き）

読んで下さってありがとうございますー。ビーでもいい話ですが昨日  
作者は車をぶつけてしまいすごくブルーな1日を過ごしました。でも  
も友達の励ましがとても嬉しかったです。読者様からの感想も同じ  
くらい嬉しいので宜しければお願いします。

「知り合いなのかい?」

心配そうな顔で幹村さんが尋ねる。

俺は静かに答えた。

「ええ…さっき昨日は友達の家に泊まつたって話しましたよね。その友達っていうのが…海堂空なんですね…。」

幹村さんも驚いた様子だ。

「じゃあ、その子もここに…。」

今まで俺はその事を想像しないようにしてきた。俺だけが連れてこられたのだと、そう思おうとしていた。  
しかし現実は甘くない、あいつも閉じ込められたなんて…。

あいつと俺の出会いは小学校まで遡る。

両親を亡くした俺はもともと住んでた土地から、おじさん夫婦の住んでいる地に移ることになった、学校も転校した。おじさん夫婦は良くしてくれたけどタダでさえシヨックの大きい事が起きた後の転校は辛かった…さらにその事でふさぎ込んでた俺にはなかなか友達ができなくて、俺はクラスに馴染めずにいた。そんなある日俺はクラスの嫌な奴ら3〜4人に校舎の裏に呼び出された。転校生を狙つたイジメってやつだ。俺は用がないなら帰ると、言つて帰ろうとしたがそんな簡単に帰れるわけがない。あつという間に喧嘩になつたがさすがに多勢に無勢すぐにピンチになつた。やられる!と思つたその時、ランドセルが間に割つて入つてきて相手の動きが止まつた瞬間

「助太刀いーーー！」

と叫んでそいつは飛び込んできた。

「おー!こいつら一緒にぶつ倒そづざ」

とわくわくした顔で言つたそいつはもう相手に向かつて走り出していた…。

そいつが乱入してからは形勢逆転し、イジメグループは「おぼえてるよ！」

と月並みな台詞を吐き捨てて逃げていってしまった。

「つったく！あいつらは何であんなに暇なんだ？つと俺もか！」  
そいつはこっちに視線を移して大丈夫か？と言つた。俺は、うんと返して、なんで助けたのか聞いてみた。すると

「ん～あいつら転校生とか来るといつもあんな感じなんだよ。俺そういうの嫌いでさ…まあ正義の味方とか男のロマンじゃんか」「二カツ」と笑つた。

俺は思わず笑つてしまつた。両親がいなくなつてから初めてだつたかもしけない。

「笑うなよー、あつそうだ！俺は海棠 空つていうんだ。みんなは空つて呼ぶけどね」

ちょっと照れたあと空は言つた。俺も自己紹介して俺達は友達になつた。

空は明るく頼りがいがあり学校でも人気者だった、空のおかげで俺もだんだんと学校に慣れてきた。中学に上がる頃には親友と呼べる仲になつていたが中学も卒業というときに事件が起きた。空が前々から因縁のあつた奴らに襲われたのだ。

結果だけを言えば空はその頃空手を習つていて、いい成績を残すくらい強かつたから返り討ちにしたらしが相手はなかなかの人数で来たらしく、空は右手に完治しても大きな傷跡が残る大怪我をしていた。空はあえて俺に伝わらないようにしていたらしく後日その事を知つたのだけど、俺は助けに行けなかつたことを悔やんだ。空は気にするなと言つていたけど、俺は次にそんな事になつたら必ず助けに行くと心に誓つた…。

そしてこの状況だ。俺は空がどこに行つたのか聞くと工藤さんは、

俺達が入ってきた扉と対になる扉を指差した。

俺は工藤さんと幹村

さんに

「いいで待つてて下をこーー」

と言つとその扉の向ひに駆け出した。

時間はPM08:15を過ぎていた。

## 06 # 親友（後書き）

読んで下さり本当にありがとうございます。

読者様から鋭い意見が届きましたが、ズバリその通りです！しかし全く別物にできるように頑張りたいと思っています！

つたない文章ですがごしごし感想・評価お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5478a/>

---

パンドラ・ボックス

2011年1月7日02時20分発行